

B-1-21 当院における定量噴霧式吸入薬の使用実態についての検討

独立行政法人国立病院機構道北病院薬剤科 新敷 祐士

【目的】当院呼吸器科では呼吸リハビリテーション（以下、呼吸リハビリ）をクリニカルパスとして導入している。平成15年4月より薬剤科がこれに参画することとなり、現在では呼吸リハビリ対象患者に薬剤管理指導を行っている。呼吸リハビリの対象となる患者は肺気腫等の慢性閉塞性肺疾患であり、その薬物療法は気管支拡張薬・ステロイド等の吸入薬であり、特に抗コリン薬が第一選択薬とされている。長時間作用型の吸入薬は、患者が症状の改善を自覚できることが少なく、また使用方法も煩雑かつ種類によって違うことからコンプライアンスが不良である場合が多く認められる。そこで、第一選択薬の抗コリン薬の剤形でもある定量噴霧式（以下MDI）吸入薬の使用実態を調査することとした。

【方法】当院呼吸器内科に入院中のMDIが処方されている患者を対象に、MDI用吸入指導マニュアルを作成し、吸入手順の項目に沿って行えているか薬剤管理指導の際に担当薬剤師が調査し、その可否を集計した。期間は平成15年10月から16年4月まで。実施延べ人数50名（男性45名、女性5名）、平均年齢は68.6歳であった。

【結果】指導マニュアル中特に出来ていなかった項目として1) 吸入前にボンベを振る（正答率74%）、2) 吸入後に数秒

（約10秒間）息をこらえる（62%）、3) ボンベ1本の有効噴霧回数理解している（52%）などがあった。これらの結果はMDIを使用している患者の多くがその使用方法を正しく理解しておらず、漫然と使用している実態を示唆するものと思われる。このことは期待される効果が得られないだけではなく、コンプライアンスの低下や過剰投与による副作用発現の可能性を示唆していると考えられる。

【結語】今回のMDI使用実態調査において、多くの患者が使用方法を誤って理解していることが示唆された。吸入薬の適正使用にあたって、主治医による初期導入説明やその後の薬剤師による吸入指導が必要と考えられ、チーム医療における医師と薬剤師の連携の重要性が示唆された。また、今回得られた知見よりMDI使用に際して重要な点をまとめた患者用配布資料を作成した。今後の課題として調査・指導を継続し、吸入薬の適正使用を啓蒙する必要性があると考えられる。